

をも云ひ得ぬ代りに、額からたら〜と断末魔の汗を流した。其の時稔は此の世の光から消えて行く父の最後の面を覗き込みながら、「お父さん、苦しいでせう」と絞るやうな聲を出したもので、彼は死んで行く父を、終にどうすることも出来なかつた。今稔の胸には其時の光景が浮んで来た。彼は深い哀憐の情を以て、弟の苦しげな一舉一動を注視した。さうして丁度爲雄自身に感じてゐると同様の苦痛を、自分も共に胸に感じた。しかも自ら手を下して、弟をどうしてやる譯にも行かなかつた。

苦しい沈黙が、差向つてゐる二人の間に暫く續いた。

「其後はどうだね。——兩足を伸ばしてゐたら善いだらう。」程経つてから稔は辛うじて此の一言を云つた。

「え、」と爲雄も亦只一言を答へた。さうして兄の變つた様子——髭を立てた顔——綺麗に分けた髪の毛——衿飾を着けた襟元などを、暫くじろ〜と眺めてゐたが、やがて視線を傍に外して、其まゝ固く口を結んだ。何かの拍

子で話半に、ふと氣に喰はぬことでも起つて來ると、口を結んで疊に目を落すのが、彼の平素からの癖であつた。そんな時には、彼の胸の中には云ひた

いことが一杯溜つてゐた。

「兄さんも……愈御卒業でお目出度うございました。」

稔は覺えず慄然とした。彼は、爲雄が病院へ入る前からも、一種の嫉妬的態度を以て、屢々自分の卒業を罵つてゐたことを思ひ出した。さうして又此の長い、無念な、病院の一年間、彼は只此の一言を口づから兄に對つて云ひ得る今日の日の到着するのばかりを、手薬煉引いて待つてゐたのではあるまいかとまで思はれて來た。稔は暗夜に抜手も見せず、白刃を胸先につきつけられたやうな感じがした。

「一度見舞に早く歸りたいと思つてゐたんだが、色々と事情もあつたもんだから。」稔は辯解でもするやうな調子で云つた。

「いゝえ、大變御厄介ばかりかけて済みませぬ。」

「それに脚氣も悪いさうだね。」

「このざまです」と投げやるやうに云つて、爲雄は兩足で疊を叩かうとしたが、強直した足は彼の意思に従はなかつた。無念げな涙が二三滴、彼の兩頬をほら／＼と落ちた。

稔は弟の容子を見てゐるに堪へなかつた。

やがて爲雄は、永い間の着の身着の儘でよれ／＼になつた袴の袖口で、無造作に目の縁を拭いたが、顔は又直に元の緊張した色に復つた。彼は今の涙を後悔してゐるやうに見えた。

「兄さん、御願ですから今一度僕を國へ歸らして下さい。」爲雄の固く結んだ唇は、徐々に其の病院生活の不平を訴へはじめた。

爲雄の語るところに據ると、彼は病院に收容されてゐる多數の患者の中で、最も厄介者扱ひされてゐる一人のやうであつた。敢て私立ばかりとは云はな

い、一般に何處の病院に於ても見られる通弊として、看護婦や又は看護夫等は、彼等に對する病家からの附届の有無や、若しくは其の多寡に従つて、患者の取扱ひを二通りにも三通りにも區別する傾向がある。其れを爲雄の身元引受人からは、未だ一度も彼等に此租税を納めて呉れたことがない。(爲雄は叔父の家の不平を云つたのであるが、稔には其が自分に對する暗諷のやうに耳痛く聞取られた。)而も脚氣で足腰が利かなくなつてからは、朝夕の立居から便所に行く世話まで、人手を借らねばならなくなつてゐるので、人一倍看護夫に厄介をかけてゐる。だから彼等も益々爲雄を嫌つて、容易に彼の用事を聞いて呉れない。何か頼むと直ぐ暫く待てとか、今手の塞がつてゐるのが見えないかとか小言を浴びせる。而して早く退院せよがしに取扱ふ。つい此間も、餘り知らぬ顔をしてゐるので、止を得ず獨りで捉まり立ちして厠に行かうとすると、不意に跟いて隣席の患者の湯呑を壊した。其れが動機となつて其患者は激しはじめた。すると二三人の看護夫が飛んで来て、其中の一人

は足腰も立たない癖に生意氣など云ひながら、行きなり爲雄を小突き倒した。
——こんな虐待を受けるだけでも、爲雄はもう此病院にゐるに堪へないと云ふのであつた。

稔は黙つて弟の話の話を聞いてゐた。固より彼は爲雄の云ふことを悉く信ずる譯には行かなかつた。對手は既に病人である。——様々の幻覺や妄想に由つて、動もすると事實を誤解し、又は曲解する傾きを持つてゐる精神病者である。其の云ふところは何處までが眞實で、何處からが謬想であるか、判断が付かない。けれども若し精神病者に此弱點あることを利用して、平氣で虐待してゐる看護夫がありとすると、若し又精神病者の此弱點に乗じて、不正の金錢を貪らんとする病院がありとすると——油斷のならぬ世の中のことだから、そんな病院の一つや二つはないとも限らぬ——其れこそ黙過すべからざる社會問題である、否人道問題であると稔は考へた。

「兄さん、御願ですから、どうぞ今日僕を兄様と一緒に國へ歸らせて下さい。」

爲雄は兄の黙つてゐるのに堪へかねて、再び前の言葉を力強く繰返した。

「今日つて、さう急なことを云つても仕方がない。……退院するならするにしても、院長さんと能く相談をしなければならぬから……」

稔の言葉のまだ切れないうちに、爲雄は早く其を奪ひ取つた。

「院長さんは、もう疾うから僕の退院を許してゐます。」

稔は餘りに容易く自己の胸中を見抜かれたやうな感じがした。彼の言葉は少し慌てた。

「其れよりも此の病院が厭になつたのなら、寧ろ何處かへ轉院して見たらどうだね。脚氣の轉地にもなつて善からう。」

爲雄が何とも返答しないので、

「其れに今度はひよつとすると、お母さんを東京へ伴れて歸ることになるかも知れないんだから……」

爲雄は少し驚いた風であつたが、やがて前よりは一層冷やかな態度になつ

て、

「其れは然し——お母さんは逆も東京へ出る氣遣ひはありますまい。」
稔は再び自分の計畫を、易々と看破されたやうな感じがした。

「だが、假令國へ歸るとしても、今のやうなお前の容體では、あの山路が大變ちやないか。其れよりも暫く、京都邊か何處かの土地の善い處へ轉地してゐて、ぶら／＼歩けるぐらゐまで脚氣が癒つてから歸つたらどうだ。其の方がお前も愉快だらう。」

「しかし轉地するにしても、僕はもう精神病院には懲りました。」

「其れは今度入れるならば、脚氣専門の病院へ入院させやう。」

爲雄は又口を結んで、稔の膝のあたりに視線を落した。さうして凝と兄の心の中を探るやうな風に見えた。

「柿を持つて来たから食べないか。」

稔は提げて来た信玄袋を引寄せて紐を解いた。彼は最早此處僞多い會話を續けてゐるに堪へなかつた。どうかして話頭を轉じたいと思つた。

袋の中には、お孝から病人に渡して呉れと頼まれて来た、綿入や襯衣の類が二三點と、先刻病院へ来る途中で、わざ／＼車夫を煙草屋に立寄らせて、爲雄への土産にと買つて来た、敷島の大箱とが上層に載つてゐた。——煙草が病氣に善くないことは知つてゐたが、鈴木氏の話を聞いた時から、稔はこれを買つて行つて、弟を喜ばせてやりたいと思つてゐたのである。——其等を一つ／＼取出すと、袋の底には、大きな五庄柿が二十ばかりもごろ／＼としてゐた。

「家の裏に生つた柿だよ。お前が非常にこれが好きだと云ふ話だつたから、此の間濱江と二人して取つて持つて来た。」

稔は手巾を擴げて、其上で柿の一つの皮を剝いた。さうして頭から深く十文字に刃先を入れて、其れを爲雄に差出した。

「まあ、兄さんお上りなさい。」

爲雄は手を出さうともしなかつた。其れが又世間普通の禮讓から起つた辭退とはどうしても見えなかつた。彼の顔には疑惑の色さへ動いてゐた。

稔は直ちに弟の意を解した。同時に彼は、何とも云へない不愉快を感じた。さうしてこんな重たい、餘計なものを、わざ／＼村から持つて来た、自分の愚なる親切を寧ろ悔いた。稔は黙つて、弟に差出した手を引込めて、其柿を自分で食つてしまつた。

爲雄は其間、袂の底からよれ／＼になつた巻煙草を一本摘み出して、其を惜しさうに一口／＼吸つてゐたが、やがて稔が柿を食ひ終るのを見済まして、煙草をそつと火盒の縁においた。さうして自分で信玄袋から、柿と小刀を取り出して、不器用な手付で皮を剥きながら、むしやり／＼と食ひはじめた。

「此處いらが確かにまだ間違つてゐる。」——稔は腹の中でこんなことを考へてゐた。

此時不意に廊下の奥の方から、凄じい叫喚の聲が聞えて来た。其れは丁度人間の七八層倍も粗大な聲帯を持つた、ある恐ろしい生物の咽喉を固く緊めて、百日百夜も咆えつゞけに咆えさせておいたと云ふやうな、噎枯れた、猛烈な怒號であつた。さうして泣いてゐるのか、笑つてゐるのか、唸つてゐるのか、罵つてゐるのか、殆んど譯の分らないものであつた。稔は呆れて耳を敬てた。さうして覺えず身顛ひが出た。彼はまるきり方角も分らぬ、人里離れた夜の山路で、突然、飢餓に荒れ廻る猛獸の咆哮を聞かされた時のやうな恐怖を感じた。

其の叫聲は大分長く續いた。

やがて一しきりして其れが何時となく止んだ。稔はほつとして我に返ると、間もなく更に又他の新たな聲で、大きな怒號が追つかけて起つた。

「ばてらにばてらに、ばてらのばてら。」
「ばてらにばてらに、ばてらのばてら。」
何時まで經つても果しがない。只同一の言葉が繰返されるばかりであつた。

先刻から飲差しの巻煙草を口の端まで持つて行つたまゝ、凝と彼方の叫喚に聞入つてる様子であつた爲雄は、急に眉をひくくくと動かして、巻煙草を灰の中に突込んだ。さうして忌々しさうな調子で獨語を云つた。

「馬鹿な！ 彼奴等こそ本當の氣狂ひだ！」

「一體病院の中はどういふ風になつてゐるんだ。」稔は廊下の奥の叫喚に心を奪はれながら、半ば夢のやうな聲を出した。

「一等だけが一人一室になつてゐて、其外は皆雑居のやうです。」爲雄は兄の間に應じて、又彼の目に映じた病院内の模様を語り出した。

爲雄の部屋には、今八人の患者が雑居してゐる。皆荒くれた男ばかりで、彼よりも年下なのは今年十九になる、中學五年まで行つたと云ふ男だけである。女の患者は一人も見えない。居るのか居ないのか爲雄には分らぬ。看護婦も入院の時二三人廊下で見かけたとはあるが、病室には男の看護人ばかり

である。さうして此奴等が毎日佛頂な面を提げて、廊下で嚴重に見張つて、折々がちや／＼と鍵を鳴らしては、病室へ入つて来て、誰彼なしに小言を食はせる。

病室で爲雄の會話相手になり得るものは、只此の中學生ばかりである。外の奴等はまるで共に語るに足りない。殊に爲雄の氣に喰はない奴は、右の頬に大きな丹瘤を拵へた、蜘蛛眉の、人相の悪い四十男である。此奴は多分人殺しでもして、牢屋にぶち込まれるべき筈のところを、何かの間違ひで、こんな病院に入れられて来たのだらう。何時も屁理窟ばかり並べて、一人で憤憤して、さうして同室の、片目の爺さんを窘めるのを、日課の一つと心得てゐる。其の又片目の爺さんは、もう善い年になつてゐながら、女房の身持が異しいと云つて、明けても暮れても其心配をしてゐる。さうして院長や醫員の顔さへ見ると、家内の事が氣にかゝるから、どうか早く退院させて呉れと云つて強請んでゐる。

件の中學生は堺とかの出生で、爲雄が入院してから間もなく、彼も此院へ送られて来た。非常に頭腦の善い、氣の毒な男である——と爲雄は云つた。彼自身爲雄に語つた處に據ると、彼は學校でも常に首席を占めてゐたが、或時校友會大會の席上で、猛烈なる學校攻撃演説をやつて、其れから校長の憎悪を受けた。尤も其以前にも、教師の出來ない幾何學の難問題を、即座に解答して見せて、教師の憎悪も買つてゐた。(數學の教師が即ち教師であつたのだ)とうとう彼は精神に異状があるといふ口實の下に、學校は諭示退學となつてしまつた。さうしてこんな病院へ入れられることゝなつたのださうである。爲雄は此男と非常に談話が合つてゐる。殊に神の世界を信ずる點に於て、二人は全く議論が一致してゐるとのことであつた。

稔は例の如く黙したまふ。弟の話に耳を傾けた。さうして胸の中で、無氣味な病室の幻影を、幾通りにも描いたり消したりしてゐた。すると爲雄は又云つた。

「兄さん、一度參考の爲めに、病室の中も見て行つて下さい。——尤も病院の方では内情を秘密にするため、面會人に病室の模様を見せないかも知れませぬが。——其れは云ふに云はれぬ殺風景なものです。彼方の隅でも、此方の隅でも、病人が夜晝なしに蒲團を冠つて、ごろ／＼と寐てゐる。そして中には大小便垂流しの奴もある。まるで豚小屋同然です。中でも一番厭なのは、あの狂人の叫聲です。朝から晩まで、殆ど誰奴か此奴か、咆えるか喚くか爲續けてゐる。逆も辛抱し切れたものちやありません。正氣なものまでが、時には一緒になつて喚いてやりたくなるほど苛々して來ます。こんな處に一年も押籠められてゐては、大抵の者が氣狂にならざるを得ませぬ。最初から氣狂で入院したものは、益々悪くなるばかりです。現に僕の部屋などでも、善くなつて退院したものは、まだ一人もありません。其處にも矢張り病院の奸策が潜んでゐるんです。」

爲雄の眼は、段々異しい光に輝いて來た。

「其の又病人の意地穢いことは、殆どお話にもなりませぬ。」爲雄は更に語り續けた。

「誰かに面會人でもあつて、菓子を買ふとか、煙草を持つて來るとかすると、皆が寄つて群つて直ぐ奪ひ合つてしまふ。肝腎の持主の手には、殆ど一物も残らない。宛て餓鬼道の有様です。……しかし其も無理はありませぬ。すべて病院が悪いです。病院が皆を餓鬼にしてしまふんです。入院料を取つてゐる手前で、三度の飯だけはどうか斯うか食はせませんが、其外には何の接待もしない。而も其飯の不味と來ては、殆ど食へたものぢやありません。南京米か支那米のぼろ／＼した奴に、菜と云つては高々大根か菜葉の煮たのです。肉などは殆ど付けたことがない。これでは到底營養の續く筈がありません。さうして間食をしちや善くない、煙草を飲んちや善くないと云ふ。物を買ひにやると、眞の申譯ほどしか買つて來ない。皆看護夫等が途中で盗むんです。」

煙草なんかは日にたつた三本しか呉れない。然し考へて見て下さい。病院の一日は實に長い。其よりも一夜は更に／＼長い。病院を取巻いてゐる煉瓦塙以外の世界に住んでる人達には、迎も想像すら出來ないほどの恐ろしい、物凄いな長さです。此の恐ろしい、物凄いな、長い日夜を、たつた三本ばかりの煙草で、どうして紛らふことが出來ませう。虐待も虐待も、人間の歴史あつて以來の虐待です。おまけに手紙なんか出さうとすれば、悉皆病院で沒收してしまふ。餘りのことに看護人等に道理を説いて聞かせやうとすると、彼等は何時でも皆まで聞かずに、直ぐ鐵拳を振上げるのです。兄さん、此病院は宛て軍隊です。軍隊とちつとも變りはありません。」

爲雄は又ひく／＼と眉を上げた。
「一體無暗に人を擲ると云ふ法はない。其は法律でも禁じてある。——個人の權利と自由とは確に法律でも認めてある。其を無暗に人を牢獄同様の病室に監禁して、何か云ふと直ぐ擲ると云ふことは野蠻人の所作である。正義を

解し、法律を有する文明人の所作ではない。無暗に人を擲るものは、殴打罪として拘引されなければならない。然るに彼等はいつも同じ濫い面をして、病院に勤めてゐる。未だ一度も其罪を問はれたのを聞いたことがない。何故に法律は彼等を罰しないのですか。何故に又院長は、速かに彼等野蠻人を放逐して、病院の名譽を回復しやうとしないのですか。彼等は相手が精神病者でさへあらば、いくら毆つても善いと思つてゐるのか。第一誰が精神病者か。其からして先づ詮議をして貰はなければならぬ。」

爲雄は語るに従つて益々雄辯となつた。

「考へて見て下さい。彼等が目して氣狂扱ひをする我々と、彼等との間に、果してどれだけの相違がありますか。彼等が物を云ふなら、我々も物を云つて見せる。彼等が考へるなら、我々も亦考へて見せる。しかも論理だつて推理だつて、彼等看護人風情に負けることではない。只彼等と我々との違つてゐる處は、彼等が看護人で我々が入院患者と云ふだけである。若し彼と我と

の位置を顛倒して、彼等を錠前と鐵格子の附いた室内に押籠め、我々が其外を守るならば、即ち我々が看護人で、彼等は正に氣狂ひだ！」

此時先刻の壯丁が、一寸二人の様子を窺きに來たが、何にも云はずに又行つてしまふ。爲雄は十年の怨敵をでも見るやうな眼差しして、暫く其後影を睨まへてゐた。

「ばてらにばてらに、ばてらのばてら。ばてらにばてらに、ばてらのばてら。」

先刻の物凄叫聲が、廊下の奥から又新たに起つた。

「しかし、こんなことを云ひ出すと、僕は兄さんにまで誤解されるかも知れませぬ。」暫くしてから爲雄は急に聲を低めて云つた。

彼の態度は忽ち一變した。今まで興奮の絶頂に達してゐた彼の相貌は、突然護球に孔の明いた如く、其の緊張の度を失つて、顔の色さへ一層青ざめて來たやうに見えた。稔は弟の此急激の變化が、如何なる内部の刺戟に基

いたか、固より想像することが出来なかつた。

爲雄は怖々とした様子で、兄の顔から視線を外らせた。

「こんな愚にも付かぬ屁理窟を並べると、兄さんも定めし僕を氣狂だと誤解して下さるでせう。——何だか兄さんの顔色が、既にさう思つてるやうに僕には見えます。しかし其は間違ひです。夫は餘りに残酷です。其處は僕の事情も十分に察して戴きたい。成程僕は一昨年の夏から、變な病氣に罹りました。——今まで見たこともないものが目に見え、今まで聞いたこともないものが耳に聞える。而もそれが、何物の姿も存在しないのに聲だけあつたり、又何物の形をも許さぬ闇夜に、様々の影が目を捕へたりする。最初は自分にも合點が行かぬ。今まで住馴れた此世界に、こんな不思議なことがあらうとは何しても合點が行かぬ。此の先自分はどうなつて行くのだらう。宛て底の見えない、眞暗な古坑の中へでも投げ込まれたやうに、落着く先の見當が付かない。激しい恐怖と激しい不安、僕は久しい日夜を其等のものに苦められ

ました。さうしてこれが世間に能くある氣狂と云ふものではないかと思つて、我知らず戰慄したことも度々でした。自分でさへ自分を疑つたくらゐるでも、他人が氣狂と誤解するのも無理はありません。時にはどうしたら此苦悶から脱れることが出来るかと考へて、心にもない亂暴を働いたり、最後には自殺しやうとまで決心しました。これが僕の終にこんな病院へ入れられることになつた原因です。けれども今から考へて見ると、總ては皆、此の不思議な世界へ住替へる準備のやうなものだつたのです。」

稔の頭には、此の時偶と、爲雄の日記に書並べてあつた、十七字の中の一
番最初の句が浮んで來た。同時に彼は、爲雄の謂はゆる不可思議の世界とは、
どんな世界か聞いて見たくなつた。さうして何心なく問をかけた後で、人間
はこれほど痛ましい現實に對面しながら、なほ好奇心の働くものかと、寧ろ
自分を恐ろしく感じた。

「實に不思議な世界です」と、爲雄は恰も兄の問を心に豫期してゐたやうに

顔を上げた。

「諸々の神と交通のある世界です。其處には澤山な神の使者がゐます。僕の處へ毎日尋ねて來るのも其中の一人です。名前は云ふことは出來ませぬ。其がいつも神々の世界の報知を僕の處へ持つて來るのです。寐てゐる時でも、覺めてゐる時でも。今でも來て欲しいと思へば、直ぐ呼寄せることが出來ます。これが僕の生命の親です。様々の悪魔や誘惑者の聲に惱まされてゐた僕を救つて呉れた生命の親です。然です、あの日です。あの日に助けられました。……」

爲雄は暫く首を傾げて、其日を思ひ出すやうであつた。やがて、
「去年の一月二十一日、僕が家出をしたあの寒い日です。逆も生きてる甲斐のない身體、寧ろ死んで終はうと僕は考へました。死ぬならば成るべく母に迷惑のかゝらないやう、遠い處へ行かうと思つて、午後二時頃から家を出ました。町まで出て、其處で鐵道往生でもして果てる覺悟だつたんです。丁度

東山の峠近くなる頃から、粉雪がちら／＼と降出して來ました。頂上の三本松まで着いた時は、空模様は所爲で、四邊がもう夕暮のやうに暗くなつてゐました。今夜此雪に血を流して、自分と云ふものは此世の中から消えて終ふのだ。——さう考へた時ですら、僕は別段悲しいとも思ひませんでした。寧ろ早く塚が明いて善いぐらゐに考へてゐました。其れで松の根方に腰をかけて、かじかんだ手を息で暖めてゐると、其時です。遙か遠い、遠い向うの方から、蛇か蜂でも吐くやうな、ふうーと云ふ聲が聞えたかと思ふと、其が非常な速力で以て近づいて、初めて此の神の使者が僕に聲をかけたのです。爲雄は急に屹となつて、嚴かな調子で、抑揚を付けながら、其神の使者の聲を真似た。

「神田爲雄……死ぬにおよばぬ……僕は此の一聲で救はれました。」

「其れから僕は此の神と交通のある世界に入りました。」爲雄は直ぐに又後を

語りつづけた。――

「今まで全く知らなかつた不思議な世界です。其處には様々の珍しいことがあります。其處には又人間の壓制や迫害――そんな卑劣な話なんかは起つた例もありませぬ。兄さん、僕は此の時から、自殺など夢にも考へなくなりました。寧ろ何時までも生きてゐて、我々の住んでゐる此の俗悪なる世界の外に、別にこんな不思議な世界のあることを、普く世人に知らしめるのが、僕の使命だと考へるやうになりました。其から僕は會ふ人毎に、神の世界の奇を説いて聞かせました。皆熱心に聞くだけは聞かぬが、信ずる者は一人もありませぬ。僕は思ひました、田舎の百姓なんかは無學だから、僕の云ふことが分らないんだと。其れで病院へ来てからは、看護夫や醫員にも説きました。駄目です。院長でさへ僕の云ふことを信じませぬ。そして其が病氣の所爲だと云ふのです。――此足なども院長は脚氣だと云ふのです。藪醫者奴が！これが脚氣で堪るものですか。脚氣でない證據には、彼等が今日まで随分い

ろんな藥劑を飲ませますが、ちつとも癒らないのを見ても分ります。これは脚氣ではありませぬ。これは僕の足の皮膚と筋肉との間に、小さな悪魔が無數に潜んでゐるのです。さうして其が夜晝なしに蠢々と動いてゐるから、こんな麻痺を感じるのです。之は神の世界から與へられた、僕に對する試験の一つです。其試験の終るまでは、決して癒ることがありませぬ。其れを院長は信じないのです。のみならず僕の云ふことは何でも彼でも、皆僕を此監獄のやうな病院へ幽閉しておく理由の材料にしてゐるんです。」

爲雄の聲は次第に又熱を帯びて來た。

「若し僕が神の世界を信ずるが故に精神病者なら、何故天下の宗教家は悉く病院へ入れられないのですか。若し又今日まで誰も云はなかつた異説を云ふのが病人なら、何故天下の人はニュウトンの引力説や、コペルニクス地の動説を信ずるのですか。其からして非常な矛盾ではありませんか。……」

稔は愕然として覺えず爲雄の顔を見詰めた。ニュウトンには別に驚かなか

つた。けれども爲雄がコペルニクスを知つてゐやうとは、全く思ひも寄らな
いとであつた。彼は、催眠術にかゝつた者が、生涯にたつた一度しか出會つ
たことのない六かしい學名や、逆も記憶が出来さうもない外國語を、極めて
日常の用語のやうに、容易く語り出す例などを思ひ合せて、爲雄の今の談話
も亦これと同様の心理に基くものではないかと考へた。

爲雄は更に新たなる氣焔を高めた。
「ニュウトンは林檎の落ちるのを見て地球の引力を發見した。コペルニクス
は従來の天動説を排して地動説を唱道した。けれどもまだ地球の引力に引付
けられて、地の底に吸込まれたものもなければ、地球の迅速な回轉に由つて、
空中に跳飛ばされたものもない。否、眩暈を感じたものさへ聞かぬ。畢竟是等
は我々の感覺を無視した空説と云ふに過ぎぬ。其てゐて誰一人此の空説を疑
つてゐる者が無い。今僕の云ふところの神の世界は、幾度か僕自身の眼にこ
れを見た。又其神の聲は幾度か僕自身の耳にこれを聞いた。僕に取つてはこ

れくらの正確な事實はない。其に院長は之を信じない。そして僕を益病人
扱ひにする。——兄さんなんかも矢張り院長の味方です。僕を氣狂だと思つ
てるんです。」斯う云つて爲雄は突然又談話を前に戻して來た。さうして再び
稔を驚かせた。

「其は兄様が僕を國へ返すのを厭がる理由は能く分つてゐます。僕は随分亂
暴をしました。お母様を殴つたこともありませう。妹を酷い目に會はせたこと
もあります。けれども其をするには、僕にも亦僕だけの理由はあつたのです。
決して兄さんが東京にゐて、お母さんや濱江の虚偽多い、自分勝手な手紙だ
けて判断してゐて下すつたほど、僕の無法ばかりではなかつたのです。實に
母と妹とは僕を縛りました。僕が別に亂暴もせず、靜に寐てゐるところを
縛りました。さうして僕を炭俵か何ぞのやうに、麻緒でぎう／＼と結へ付け
て、七日七夜と云ふもの放つておきました。酷い。實に酷い。天下にこんな
残酷な母や妹が又外にあるでせうか。僕はこれを考へると、今でも無念の

涙が湧いて來ます。」

爲雄の頬の肉は過度の興奮に激しく顫へてゐた。

「辛かつたです。兄さん、考へて見て下さい。實に辛かつたです。僕は最初の三日三夜と云ふもの、殆ど徹睡ともすることが出来ませんでした。」

「憎い。憎い。一途に母と妹とが憎い。何の罪あつて僕をこんな酷い目に會はせるのか。憎い！ 今に見よ、僕の此手が自由になつたら！ 鉈は柵にある。斧は物置にあるところを知つてる。あの鉈を提げて、あの斧を振つて、母と妹を滅茶苦茶に擲き殺して呉れる。さうして自分も一緒に死んで見せる。容赦はしない。世の中の残酷な母や妹の懲戒の爲めにも此の儘彼等を生かしてはおかぬ！」

「奮然として立上らうとすると、忘れてゐた、手も足も共に利かないです。僕は行きなり自分の手に食付きました。さうしてがんぢりがらみに縛られた

手の麻繩を、がち／＼と前歯で噛み出しました。若し僕に猛獣の牙があつたら、其時の僕の面相は、屹度猛り狂つた虎か獅子のやうに見えたでせう。母も妹も直さま隣の部屋へ逃込みました。そして眞青になつて慄へながら、折々障子の破れから、僕の様子を覗いてゐるのです。復讐！ 今に狼狽へるな！ 僕はこんなことを胸に考へながら、其晩は夜つびて麻繩をかじりました。けれども麻繩は思つたより強い。其れを力限りに噛續けてるうちに、僕の歯尖は段々と磨滅らされて、最終には吸呼を引くにさへ、齒跟がづき／＼と痛んで來ました。——其後僕の齒痛が非常に激しくなつて、一月餘も川瀬にかゝらねばならなくなつたのは、全く其夜の結果でした。——其れでも僕はなほ努力しました。さうして夜の引明頃までかゝつて、漸く其麻繩が切れさうになると、残酷な母と妹は飛んで來て、更に又麻繩を新しくしたのです。——其時は併し、僕の齒は最う役に立たなくなつてゐました。「僕は忌々しさにごろ／＼と部屋中を轉がりました。手を縛られたまゝ、疊に

打付け、足を縛られたまゝ空に蹴り、どうかして此繫縛から脱れたいと、七
頭八倒、足掻き廻りました。けれども足掻けば足掻くだけ、麻緒は益強く
引緊つて、丁度藤蔓が親木に絡み付いたやうに、愈深く僕の筋肉に食込む
のです。さうして麻緒の周囲が次第に紫色に腫上つて来て、皮は擦剥ける、
骨は疼く。体内の血液が其處から先へ流れて行くことの出来ない爲めに、手
足の處々が不氣味に脹れて、脈の踊りがびくびくと目に見えるのです。とう
とう僕は最後の決心に驅り立てられて、部屋の隅の柱に二度ばかり頭腦を打
付けました。すると母と妹は又飛んで来て、僕を部屋の真中まで引擦り戻
すのです。畢竟僕の苦痛を長引かせたいのだ。一思ひに僕を死なせることも
しない!!

「僕はもう根も力もすつかり盡きてしまつた。今は憤怒も復讐も悉く忘れ
て、只母と妹の爲すがまゝに、部屋の真中に轉がつてゐるより外はなくな
つて来ました。肉の痛みも骨の疼きも、段々人事のやうに薄らいて来て、自

分の身體全體が、只物憂い、氣懈い團塊か何かのやうに感じて来たのです。
さうして無暗に氣が遠くなつて、何處か暗い處へ、刻々に落ちて行くやうな
心持になりました。僕は自分の死期の段々近づきつゝあることを、臆氣に意
識せずにはゐられませんでした。

「此の恐ろしい昏睡は、四日目の夜中頃から始つたやうです。僕は只うとう
と、睡りました。さうして夢か現の間に、折々母が匙で口まで運んで呉れる
粥や葛湯を食つてゐました。斯うして五日、六日と過ぎた。七日目も僕は、
母にかけて呉れた蒲團の中に、縛られた手足を縮こませて、死にかけてた犬の
やうに丸く横たはつてゐました。」

「すると兄さん、其晩のことです。」爲雄は急に眼の色を變へて、恐ろしい物
でも見るやうにぶるゝと慄へた。

「稔も我知らず引入れられた。
其晩どうしたんだ。」

「大變な神風が吹きました。」

「宵のうちは別段變つたこともなかつた戸外が、いつの間にか只ならぬ氣勢になつて、凄じい物音が荒廻つてゐる。僕は其物音にふと目が覺めました。大變な風になつてゐるんです。」

「母も妹も最う寐たものと見えて、隣の部屋は寂としてゐます。家の中には灯も點いてゐない。母は寐る時にはいつも洋燈の心を細くして、枕許に置いて寐るのが癖であるのに、其夜はどうしたのか其薄暗い灯影さへ障子に映さない。只何處かで時計の針だけががち／＼咬いてはゐるが、無論何時頃だか知ること出来ませぬ。此「時」も「光」も失はれた闇の世界に、戸外の風だけは益々吹き募るのです。がうつと鳴つて北から襲つて來ると、家は大浪でも食つたやうに、激しい地動きがして、雨戸も障子もがた／＼と鳴りはためく。さうして其が仕切なしに續いて來る。今にも家が潰れるのではな

いかと思はれたくらゐです。

「——お母さん、お母さんと、僕は堪まらなくなつて聲をかけました。何となく只恐い。怖ろしい。責めては時間だけでも知つて、此心細い感じを紛らせたい。けれども母は何とも返事をして呉れませぬ。」

「——お母さん、お母さんと、僕は又呼んで見ました。最う半分泣聲になつてゐたのです。其れでも母の返事はまだ聞えませぬ。平素なら只一聲で直ぐ目を覺ます濱江までが、いくら呼んでも起きて呉れる氣色がない。二人とも宛でゐないやうです。」

「偶としたら母も妹も、此厄介な僕を捨て、おいて、何處かへ行つてしまつたのではないか知らん。或は又宵に何か變事でもあつて、二人共死んでしまつたのではないか知らん。——然う考へると今夜の此の突然の暴風が、何だか其變事の餘波でいもあるやうに僕には思はれて來たのです。僕はもう恐ろしさに堪へられなくなつて、頭も身體もすつぽりと、蒲團の中に小さく縮

んでしまひました。

「此の状態で二三時間も経つたでせう。或ひは只の二三分であつたかも知れませぬ。が、僕には兎に角恐ろしい長さでした。けれども戸外の風はちつとも止まない。すると、兄さん、其時です。」

「偶と僕の頭の中に、僕自身の姿が明かに浮んで来ました。手足を麻縄で縛られたまゝ、部屋の中に轉がつてゐるんです。さうして苦しさに蕩揺いてゐるんです。其を凝と見てゐると、麻縄は見る／＼太くなつて、うね／＼と動き出すのです。忽ち大きな蛇になりました。さうして其が雙方から恐ろしい鎌首を立て、激しい戦争を始めました。僕はどうなることかと思ひながら、其を凝と見てゐました。」

「——こら確かに見ておけ。これが即ち親子の争ひだぞ。——此時何處からか大きな聲が聞えました。此聲を聞くや否や、僕は覺えず戦々として慄へました。さうして其夜の謎が明かに解けました。あゝ僕は此間から幾度か母を木刀で

毆つた。そして母は遂に其復讐に、僕を麻縄でこんな縛つた。僕のやうな不孝な子供が何處の國にあらう。母のやうな残酷な親が又何處の世にあらう。あゝ萬事は既に休す。僕等母子はもう人間ではない。畜生だ。蟲虻だ。丁度今僕の手と足とで噛合つてゐる蛇のやうなものだ。神はどうしてこんな汚れた人間を許しておかうぞ。即ち今夜此恐ろしい業風を送つて、僕の一家を全滅させるのだ。神風だ！神風だ！穢れたる人間を懲罰するための神風だ！さうして此世の最終の日が来たのだ！僕は我知らず聲を立て、泣きました。喚きました。禱りました。呪ひました。さうして今にも神の世界から僕を引立てに来る魔の使者の目から免れる爲めに、僕は益蒲團の中で、出來得る限り小さくなつて縮こまりました。——兄さん其の時ほど僕の身體の小さくなつたことはありません。初めは犬のやうになりました。次には猫のやうになりました。最後には段々と小さくなつて、泥田の中に匿れてゐる田螺殻のやうになつてしまひました。」

爲雄はひく／＼と肩を窄めて、今一度稔の目の前で、田螺殻になつて見せやうと企てゝゐるかのやうに見えた。

「餘り會話が長くなつては病氣に障ります。」

不意に頭の上で聲がしたので、稔は驚いて顔を上げると、戸口に又先刻の壯丁が、たつた今爲雄の云つた魔の使者のやうに、恐い顔をして立開かつてゐた。

「さあ最う時間だから神田さんも病室へお歸りなさい。」

壯丁は爲雄を促して、再び彼の痛い足を立たせた。

「ちやお母様とも能く相談の上で、近いうちに必ず今一度訪ねて来てやるから……」稔は最後に爲雄に云つた。

爲雄は別に返事もせず、又怨恨ある壯丁の肩に取絶つた。さうして再び其黄走つた一瞥を兄に呉れたまゝ、廊下を彼方へ引摺られて行つた。稔は最

早其の後姿を見送るに堪へなかつた。彼は面會室の真中に佇立つたまゝ、化石したやうに硬くなつてゐた。と、間もなく廊下の奥で又がちや／＼と鍵の鳴る音が聞えて、やがて病室の重い戸が、永劫開くことのない獄門の扉のやうに激しく閉つた。さうして此の惨ましい二人の兄弟の世界を永なへに塞ちた。

一時間ばかりの後、稔は高麗橋通の、さる大きな會社の應接室の片隅に
 兩腕でしつかりと頭を抱へたまゝ、へし潰されたやうに卓子に倚りかゝつて
 ゐた。

彼は病院から何の道をどう取つて、此處まで辿つて来たか、自分にも分ら
 なかつた。彼は只厭はしい煉瓦塀の建物から一步でも早く遠ざかりたいやう
 な感じがして、病院の門を出ると傍目も觸らず、眞一文字に賑やかな街の方
 へ急いだことを記憶してゐる。さうして、丁度犯罪者が追手の目でも暗まさ
 うと企てるやうに、其處から又更に足に任せて、細い横丁や、穢い裏通にま

ぎれ込んだことを記憶してゐる。固より何處へ行かうと云ふ思想も、彼の頭
 には浮んでゐなかつた。彼は只夢遊病者のやうに宛もなく其處いら中を歩き
 廻つた。

とある廣い四角まで来て、彼は初めて車に乗つた。さうして車夫が物の五
 分間も走つたと思つたら、彼の身體はもう此會社の前に運ばれてゐた。

受附て物を云はうとした時、稔は自分の咽喉が糊でも引いたやうに硬く強
 張つて、容易に言葉を成さないのを發見した。二階の應接室まで上つて來る
 と、彼は最早自分自身を支へる力さへ失つたやうな激しい疲勞に打たれて、
 行きなりぐつたりと此の姿勢になつたまゝ、殆ど身動きもしなかつた。

暫くすると、應接室の一方の扉が開いて、鈴木氏の顔が現れた。

「やあ、大變にお待たせしました。此方へ入らつしやらないか」と云つて、

鈴木氏は稔を自分の部屋に導き入れた。
 稔は椅子へ腰を下すや否や、殆ど熱でも病んでる人の讒言のやうに、今日

の病院での顛末を鈴木氏に物語つた。さうして我ながら自分の言葉の酷く急
込んでゐるのに気が付いた。

「それで、結局どう云ふことに決まりましたか？」

稔の話の一通り終るのを待受けて、鈴木氏は相手の顔を見ながら云つた。

「どうつて別に仕方がありませんから、今日は何とも話をつけずに歸りまし
た。然し今日の爲雄の様子を見ると、僕も實に可愛相で堪りませぬので、責
めて脚氣だけでも、どうかして早く癒してやりたいと思ひますが、…矢張り
脚氣は國へ返すより外に仕方がないものでせうか。」

稔は又單獨で早口に訴へた。彼は自分の言葉の急勝になるのを、どうして
も抑へることが出来なかつた。

鈴木氏が其れに對して何か云はうとしてゐるところへ、隣の部屋から、丈
の低い、モオニングを着た男があたふたと入つて来て、

「ぢや君、一寸直ぐ是を見といて呉れ給へ」と、身體に不似合な大きな聲を

出して、鈴木氏の前へ、五六枚綴の赤罫の書附をぼんと置いた。さうして鈴
木氏が其れを読む間、絶えず傍から注釋めいた言葉を聲高に挿んでゐた。

鈴木氏は一通り其の書附に目を通した後、一寸首を傾げてゐたが、やがて、

「善いだらう」と一言云つた。

「ぢや、其處へ署名を貰つて置かう。」

鈴木氏は最後の餘白へ認印をついて、書附を返した。モオニングは隠袋か
ら時計を出して見て、

「では僕は一足先に行つてゐるからね…四時には君、間違なく来て呉れ給
へ」と云つて又あたふたと出て行つた。何か急の事件でもあるらしく見えた。

稔は更に何物かに追掛けられるやうな感じを高めずにはゐられなかつた。

「此邊には別に脚氣の療養所と云つてはないものでせうか？」

彼は先刻院長に聞いたのと同じ問を、殆ど呻くやうに又繰返した。

「いや、其には吾々も常に困つてゐるんです。此近在には一寸適當な處があ

りませんでねえ。」と、鈴木氏は暫く考へた後、

「其に假令あつたとした所で、爲さんには別にあゝ云ふ病氣があるんだから、普通の所では預つて呉れませぬよ。どうしても誰か朝夕詰限の附添を一人雇はなければならぬ。さうすると却て病院に置くよりも費用が嵩む。其よりは——斯う云ふと何ですが、矢張り國へ伴れてお歸りになる方が、萬事に經濟ではありますまいか。」

費用の話になると、稔は又今更のやうに心細くならざるを得なかつた。國へ歸る時東京で、殆ど血の出るやうな思ひをして、漸く工面して持つて歸つた百圓有餘と云ふ金は、昨日叔父の家の立替を拂つて、今日病院の滞納を濟ませると、最早何程も懐に残つてゐなかつた。こればかりの零餘錢で、爲雄一人だつて、此上能く幾日を支へ得やう。國へ伴れて歸るにしても金はかかる。轉地させるにしても金はかかる。病院へ放つておいたつて矢張り今まで通り金はかかる。而も自分には今一度頭腦が癒つて、東京へ戻つて、何か

新しい職業を見付けるまでは、當分一厘だつて金の入つて來る見込がない。

——稔は最早どうして善いか、自分にも譯の分らない此の忌々しい身體を、鈴木氏の前に投出して、正體を忘れて泣崩れて見たいやうな心地になつた。

稔は黙つて鈴木氏と對面しながら、心は苦しいほどざわついてゐた。

彼の頭には、絶えず今日の爲雄の面影が浮んだ。——あの黄ろい顔の腫み。あの痛さうな足の強直。其れよりも最早人間の力ではどうすることも出来ないやうな、あの恐ろしい、頑固な妄想。病院でも嫌はれ、看護夫にも嫌はれ、母や兄妹にまで持餘されてゐる、あの頼りない身體。彼の身になつたら、定めしどんなに悲しい又無念なことであらう。——さう考へると稔は今日も其の哀な爲雄に向つて、其場の都合を繕ふ爲めに、心にもない虚偽の言葉を並べて來たのが我ながら腹立たしい。胸の中は只何かなしに一杯に脹れ上つて、聞いて貰ひたいことや、相談に乗つて貰ひたいことやが、うじやうじやと煙

のやうに群つて来る。其でゐて愈口を切らうとすると、さて何から始めて善いか殆んど判断に迷ふ。どれを持出して見たところで、畢竟泣言ばかりである。さうして又右から左へと解決の付くやうな、容易い問題は一つもなかつた。

稔は最早どうして善いか分らなくなつた。云ひたいことはどうしても言語になつて出て来ない。と云つて、黙つてゐるのは更に苦痛である。斯うして相手の時間を空費させてゐるだけでも、此方から何か話を持ち出すべき義務があるやうな感じもする。彼の胸は只苛々と焦つた。

寧ろ泣けるものならば、こんな時に泣いて見たい。聲を上げて子供のやうに泣いて見たい。さうして最早誰の前でも構はないから、ざつくばらんに胸の中の煩悶を曝け出して見たい。敢て同情も憐愍も望まぬ。只有るだけの亂想あへ聞いて貰へば、少しは胸が落着くかも知れないと思はれた。——稔は、人の前ではどうしても泣けない、自分の愚かしい虚誇が寧ろ怨めしかつた。

卓上電話は此間にも頻に鳴つた。鈴木氏は其度に何か急がしい用事でも受取るやうに見えた。隣の部屋から又先刻のモオニングが顔を出して、愈是から出掛けると鈴木氏に叫んだ。其語氣は丁度君も共に出ないかと促すやうであつた。其れが顔を引込めると、今度は又給仕がばた／＼と駆けて来て、面會人の名刺を鈴木氏に持つて来る。稔は立上らざるを得なくなつた。

「さうですか。其れでは失敬ませう。どうも斯う忙しくては、おち／＼話も出来ませぬ。——どうせ今日はまだ此地にお出でいせうから、今夜又宅でゆつくりお話を伺ひませう。」鈴木氏も面會室に行く爲めに稔と一緒に廊下へ出た。

「しかし、餘り御心配なさらないが宜しいよ。」階子段の降口で別れる時、鈴木氏は親切に稔を慰めた。其聲を聞くと、稔には、一層自分で自分を憫れむ心が募つて来た。

再び人通の激しい往來へ出た時、稔は殆ど氣拔した人のやうであつた。こ

れから何處へ行つて善いか、彼自身にも全然見當が付かない。賑やかな街巷の中程に立つて、右へ行かうか左へ行かうかと思案してゐると、前から、後から、仕切なしに駈けて来る人力車や自転車が、幾度か彼に衝突らうとした。止むを得ず、足の向いた方へふらふらと歩き出しながら、自分にはもう何處へも行く處がないと考へると、今まで鈴木氏の前に抑へられてゐた涙が、一時にこぼれて來さうになつた。彼はとある橋の袂に立止つて、往來の人から自分の顔を隠さうとするが如く、水の面に目を落した。さうして臭い石油發動機の煙を上げながら、丁度橋の下を通つて行く、一錢蒸氣を無意識に眺めた。

(406)

此時偶と彼の頭の中に、今まで思ひも寄らなかつた不思議な思想が閃いて來た。彼は暫く躊躇した後、急に辻車を呼んで其れに乗つた。

車は暫く雑沓した街中を縫ふやうにして走つたが、程なく天神橋にさしか

かつた。

橋の下には溢れる許りの大川の水が、中流に鈍い弧線を描いて、静かに而も勢ひよく流れてゐる。車の上から見渡すと、右にも左にも、中途で洲の爲に兩斷された、長い鐵橋が懸つてゐて、數多の巡航船や川舟が、其の間を玩具のやうに通つてゐた。

「旦那はん、あれが中の島の公會堂だす。あの公會堂の前にな、大阪城を築かはつた太閤さんの銅像が立つてゐまんね。」

稔を土地不案内の他國者と見て取つた目敏い車夫は、往來の繁しい橋の中央で速力を緩めて、生温い言葉で煩く説明した。

やがて車は天神橋を駈抜けて、眞一文字に其橋筋を北へ走つたが、いつの間にか天満社の裏手のごたくしたところへ入つた。道幅も急に狭くなつた。兩側には此の土地でしか見られないと思ふやうな、低い竹の駒寄と、土格子の窓とを持つた同じ風の二階家がだらしなく立續いて、閑静と云はんよりは

(407)

寧ろ見捨てられたやうな貧しい町筋であつた。

車はそんな街路の間を右へ折れたり、左へ折れたりして走つた。とある家の門口に、松茸賣の荷車が止まつてゐた。薪屋の門に顔を眞黒にした小僧が薪を割つてゐたが、車夫が掛聲をして其前を通る時、小僧は手斧を休めて車上を見上げた。提灯屋の店に合羽と書いて、赤く塗つた異形の看板が下つてゐた。其横に「生澁あり」と書いて吊るした小さな木札が、風の吹くたびにくるくると廻つてゐた。

ある淋しい横町の曲り角まで来た時、

「旦那はん、此處いらが旦那はんの云ははつた町ですが、何番戸だつか」と云つて、車夫は車の梶棒を抑へた。

「たしか三十七番地だつたと思ふが……」と云つて、稔は急に胸がどつきりとした。

「三十七番戸ならもう通り過ぎたと思ひまんが——ちよつと聞いて見ますわ。」

丁度其處に水道の共用栓を抜いて、米を磨いでる年増の女があつた。車夫は其れに聲をかけた。

「何といふ内だんね？」女は手の先の水を切つて、車夫の顔を見た。車夫は車上の稔を見返した。

「誰某つて云ふんですが……」と稔は其女の方を向いて、ある人の姓を口にした。彼の聲は、こんな短い言葉を云ふうちにも、決して落付いてゐなかつた。

すると其の女のまだ答へないうちに、

「あゝ其のお内はんだつか……」と、別の女の聲が、其前の家の櫺子窓の中から聞えて、

「其お内はんはなあ、後の月に何某町の方へ替りやりました。」

車夫は番地を尋ねたが、番地は其女も知らなかつた。其れでも車夫は直ぐ又駆け出した。

「おい車夫、遠ければもう止しても善いんだよ。」
稔は車上から聲をかけた。

「なに、旦那はん、直ぐ其處だす」と、車夫は汗を拭き、走つた。

「でも番地が知れなくつては、分るまい。おい、もう引返して呉れないか。」
稔は又車上から車夫に叫んだ。

「いゝえ、狭い處だす。直ぐ知れます」と云つて車夫は矢張り振返りもしなかつた。

なほ二三度も押問答してゐるうち、車夫はもう此處が其町名だと告げた。
と見ると、丁度其處から二三軒先の軒燈に、稔が先刻口にした人の姓が、闇
に投げられた爆裂弾のやうに、彼の瞳に飛込んだ。

稔は電氣にでも打たれたやうに、急に車上に立上つて、

「おい車夫、もう、用はないんだ。直ぐ引返して呉れ」と聲高く喚鳴り付けた。

「へい?!」と、車夫は呆れ返つて、

「ちや旦那はん、これから何處へ行かはりますか?」

「何處へでも構はぬ。直ぐ元のところまで引返して呉れ。」

車夫は又梶棒を握り替へて、此の魔に魅かれたやうな客を乗せながら、韋駄天のやうに走り出した。

曇つた空からをり、傾いた西日が顔を出して、便所の傍に立つてゐる低い丸葉柳の影の先端が、向うの御休憩所と書いた家の硝子障子にまで這上る頃であつた。稔の姿はひよつこりと難波停車場の入口に現はれた。

丁度四時幾分と云ふ汽車が今しがた出たところで、構内は掃き出したやうに寂そりとしてゐた。田舎行の乗客を相手にしてゐる停車場のことゝて、次の發車までには、優にまだ一時間半許も待たねばならなかつた。

稔は柵に沿うた床几に腰を下して、ステッキの頭に手と願を託した。彼の

舉動は、先刻鈴木氏の會社で見た時や、宛もなく車で市中を駆廻つてゐた時とは、殆んど別人のやうに落着いてゐた。其れだけ彼の胸の中には、先刻の自分の狼狽さ加減を後悔する念が漲つてゐた。

「馬鹿！」と彼は時々口に出して、自分で自分を罵つた。

「馬鹿！今更あんな女に會つて、自分は一體どうしやうと思つてゐたんだ！會つて話でもしたら、自分の此の胸中が理解されるとでも思つてゐたのか！萬一理解されたところで、其れが何だ。自分の此の心の空虚が、其れに由つて何れだけの盈實を得られると思ふ……彼はもう人の妻ぢやないか。——何たる馬鹿くしい考へを思ひ付いたものだ！」

彼は顔を盛めて、頭を振つた。さうして假令一時の氣の迷ひとは云へ、溺者攫藁の輩に倣はうとした自分自身を、世にも心の弱い、淺慮な男だと我ながら輕蔑された。思ふなることを爲たと後で氣が付いた時ほど、人間は心の苦しいものはない。何だか自分で自分の自尊心を打ち壊したやうな感じもする。

同時に又稔は一層孤獨の遺瀨ない感じに打たれざるを得なかつた。

稔は顔を上げて停車場の時計を見た。針は先刻見た時とは殆ど動いてゐなかつた。彼は又自分の時計を出して見た。停車場のよりは五分ほど進んでゐた。彼は其針を直して立上つた。さうして小さな手荷物を赤帽の一人に預けておいて、ステッキだけを提げて又停車場の構内を出た。彼は凝として、心の聲に責められてゐるに堪へなかつた。

構内を出切ると、其處に狭い、汚い堀割が斜に南に流れてゐた。彼は其堀割に従いて右に折れた。丁度近いうちに市内電車が其處を通ると云ふ頃であつて、道路は今正に改修中であつた。通りの中央は深く掘返されて、數多の石材や鐵軌がところ／＼に積重ねられてあつた。

堀に沿うた片側の家並は悉く取拂はれた爲めに、對岸の家並のだらしない裏側が明らかにさまに見えた。古ぼけた壁板や、板塀や、目隠などが戸毎に續いて、洗濯物を並べて窓から窓に渡した物干竿や、小さな植木鉢をこちやこ

ちや並べた、折れさうな細い棚や、逸早く貼出した「すつぽん飴」「日の本足袋」などの廣告の看板やが、雑然と稔の眼に入つた。家と家との狭い隙間で、大根を切つてる女もあつた。水口から濁つた水の送り出てるるところもあつた。

堀には、藁屑や菜葉の浮いてゐる汚い水の上を、割木や、煉瓦や、四角な箱の菰包などを一杯に積上げた荷足船が、仕切りなしに並んで通つた。船頭は船と船とで饒舌り合つてゐる。さうして權を水中に突込む毎に、泥のやうに濁つた水の上へ、ぶく／＼と泡が浮上つた。

稔は何處までも其の堀割について下りながら、をり／＼、「孤獨だ、孤獨だ。」と獨語を云つた。

町筋が荒びれて、段々場末らしい感じが加はつて來ると共に、寂寥の念が一層稔の心に沁渡つた。

こんな時に彼の胸に浮んで來ることは、何時も、「自分は今日まで誰にも理解されたことがない」と云ふ思想であつた。勿論彼にも多少の友人はあつた。先輩もあつた。ある時代には戀人もないことはなかつた。けれども其の中の誰を取上げて考へて見ても、彼を正しく理解して呉れたものは殆んど一人も有りさうになかつた。固より自己の將來の安全や、自己の生活の保證ばかりを顧慮して、さうした打算的の動機から男に頼ることしか知らない世間多數の平凡な女や、あるひは生來の好奇心に任せて、男に戯れること其自身を目的としてゐるやうなコケット——そんな淺はかな異性から、自分が理解されなかつたからとて、別に残念だとも何とも思はぬ。寧ろ當然のことだと覺悟してゐる。けれども高等學校以來から、互に心の奥底まで語り合つたと信じてゐる二三の友人。學生時代から、最も理解に富んだ指導者として敬慕して來た二三の先輩。——其等の人々にまで自分は矢張り理解されてゐなかつたと考へた時は、稔の心は侘しさに堪へがたいほどであつた。

「人生は畢竟孤獨だ！自分を知らぬものは終に自分自身より外にはない。他人に理解されやうなど思つてゐたのが既に間違であつた。」彼は今日まで幾度か口に云ひ古したこんな言葉を、又今更のやうに繰返した。

工事中の道路は、ほんの少しの間で何方かへ曲つてしまつた。其處から尙餘程歩いた後、稔はとある橋を渡つた。掘割に別れて暫く行くと、何處へ通じてゐるものか、ある鐵道線路を横ぎつた。大分遠くまで来た積で時計を出して見たら、まだ二十分ほどしか経つてゐなかつた。稔は時間のある限り歩き廻つて見る考へであつた。彼は丁度自分自身の捨場所でも捜し索めてゐる人の如く、又色彩に乏しい、狭い、薄汚ない町に入り込んだ。

「理解されてゐないと云へば……」と、彼の追想は、又執こく先刻の思想の後を追うた。

稔は今日までの經驗中で、新聞社を辭めやうとした時ほど、自分が誰にも理解されてゐないと云ふことを、切實に感じた時はなかつた。成程彼が今後

の活計を心配して、親切に忠告して呉れた友人はあつた。又同じ理由で其舉の無謀を諷めて呉れた先輩はあつた。けれども彼が其境遇の頗る窮迫せる状態にあるにも拘らず、なほ自己の年來執り來れる方針を貫かんが爲に——自己の理想と性格とを貫徹せしめんが爲に、健氣にも此危険なる決心を敢てせんとしてゐる眞意を理解して呉れた人は一人もなかつた。否、其ばかりではない、彼が新聞を辭めたと聞くと、

「此奴今度浪人になつたので、俺の處へ何か職業の周旋か、あるひは借金の依頼にでも來よつたのかも知れない」と云ふ明察から、稔の顔を見るや否や、直に其豫防線を張つた知人はあつた。また稔がまだ一語をも發しないうちに、彼が先手を打つ積で、囊中の不景氣を語り出した敏感な友人もあつた。此等を外にしても、彼の記憶に残つてゐることはまだ幾らもある。ある知人は稔の方から更に頼みもしないのに、自分達の組織してゐる愚にも付かぬ會合へ彼を引入れて、毎月何か彼にか其會合に關する大袈裟な記事を、彼の新聞紙

上へ書かせてゐたが、稔が新聞を辭めるや否や、もう彼には用が無いと云つた風に、いつの間にか彼を其の中間から除外してゐた。又其頃稍得意の境遇に入りかけてゐたある友人は、稔を見ると半ば嘲笑的の語氣を弄して、「おい、新聞を止めて、何か善い儲け口でも見付かつたのかい」と揶揄し始めた。勿論稔といへども、こんな事實に逢着してから、初めて人情の輕薄に驚くほど、其ほど山出しの男ではなかつた。否、
「今に見よ。俺が何か一つ事業をやつたら、彼等は悉皆先方から態度を改めて来るんだ！」さう考へると、内心私かに微笑まれないでもなかつた。けれども自分は果して何日になつたら、此の窮境を脱して、是等の屈辱を彼等に雪ぐことが出来るのかと考へると、稔は實に悲しかつた。
彼はステツキの先でこつくと地面を叩きながら、行處のない人のやうに重い足を引擦つた。

ふと氣が付くと、稔はいつの間にか何處やらに見覚えのあるやうな通街へ出てゐた。前には稍勾配の急な坂が展げられてあつた。彼は再び時計を出して見て、又其坂を上つて行つた。
坂を上り切ると果して通街から右手のずつと入込んだ處に、今朝訪ねた病院の煉瓦塀が赤く並んでゐた。其を見ると、稔は今一度爲雄に會つてやりたいやうな感じがした。又會ふのが怖ろしいやうな心地もした。彼は暫く其の曲り角に立つてゐたが、やがて急ぎ足に其處を通り過ぎた。さうして、つと天王寺の境内に入つて行つた。
境内は只がらんとして殆ど人の氣勢もなかつた。向うの龜の池の方で、子供達のわい／＼云つてる聲も、思ひなしか何となく寂しく聞かれた。夕暮の色は段々と迫つて、折々冷たい風が廣い境内の砂を卷いて過ぎた。其夕方の風の中に、五重の塔は一層崇高く見上げられた。稔は宛もなく其處いらを歩き廻つた。

鐘樓の下の薄暗いところに、一人の乞食が蹲まつてゐた。稔が其前を通りかゝると、乞食は幾度か地に額をつけた。頭をくりくり坊主に刺つた、瘦せた女の乞食であつた。稔は急に、東京から歸つて来た晩に始めて見た、お孝の見窄らしい姿が思ひ出されて、何だか妙な心持になつた。さうして自分是最うあの母親の住んで居る、蟲喰だらけの古ぼけた尼寺より外に行く處のない身體だと考へた時は、覺えず眼險が熱くなつて来た。

彼は、軽くなつた財布の中から、銀貨を一つ摘み出して、其を乞食の前に投げた。そして後をも振り向かず、又通街へ出て、其處から車に乗つて停車場へ歸つて来た。

四邊はもう全然夜の色になつて、停車場の軒には既に電氣が輝いてゐた。發車にはまだ可なりの時間があつた。其でも構内には流石に乗客が騒ついで、柵に沿うた床几は殆ど空席を餘さなかつた。稔は時間表の前に立つて、最寄の停車場に着く時間を調べて見た。八時に近いと云ふことが分つた。其

處から彼の村までは約三里である。こんなに時間が遅くなつては、もう車夫は出ないかも知れない。彼は今更のやうに首を傾けた。

「なに歩かう。——車がなかつたら歩いて歸らう。」

稔は再び先刻の堀割に沿うた通街まで出た。夜見ると一層田舎じみた、薄暗い街であつた。彼方此方と尋ねた揚句、漸く一軒の荒物屋を見付けて入つた。其處で彼は、細長い、玩具のやうな小さなぶら下げ提灯を一つ買った。其を疊んで外套の隠袋に入れた。彼は又別に蠟燭と燐寸を買つた。彼は子供の時の経験で、蠟燭一挺で幾何程の夜路が歩けるか、大よそ分つてゐた。二本もあれば澤山だと思つたが、用意の爲めに三本を買つた。さうして又停車場の方へ引返した。

柳の木が植ゑてあるところまで戻つて来て、稔は其下の木柵に倚掛つた。其處で彼は發車時間の來るのを待つた。此時彼の胸の中に、嘗て高等學校の寄宿にゐた頃、故國のことやら我身のことやらにて、毎日、貧乏の苦痛が

沁々骨に徹へてゐた或夜、水道橋から元町の坂を上つて行く途中で、何が落ちてゐたものか、洋杖の先端にちやらつと音のしたのを、俯向いて闇に手探りした時の寂しい心持が思ひ出された。數へて見れば、其頃から今日までは既に六七年にもなる。自分は此後なほ何時まで、こんな怪しい心を抱いて暮さなければならぬのだらう。恐らく一生、此忌まはしい氣分を脱することの出来ない運命に生れ付いて來たのかも知れない。——斯う考へると稔は急に胸が一杯になつて來た。小さなぶらんく提灯を提げて、眞暗な三里の山路を、一人でとぼくと歸つて行く自分の後姿が目の前に浮ぶ。彼は柳の下柵に凭れて、久しい間獨りて嘔り泣いた。

改札口の方では、五分鈴が頻りに鳴つてゐた。

(をばり)

大正二年四月十八日印刷
大正二年四月廿六日發行

殺
(定價金壹圓拾錢)

著 者

中 村 翁

東京市日本橋區通四丁目五番地

發 行 者

和 田 靜 子

東京市芝區愛宕町二丁目十二番地

印 刷 者

金 崎 金 平

東京市芝區愛宕町三丁目二番地

印 刷 所

東 洋 印 刷 株 式 會 社

東京市日本橋區通四丁目五番地

發 行 所

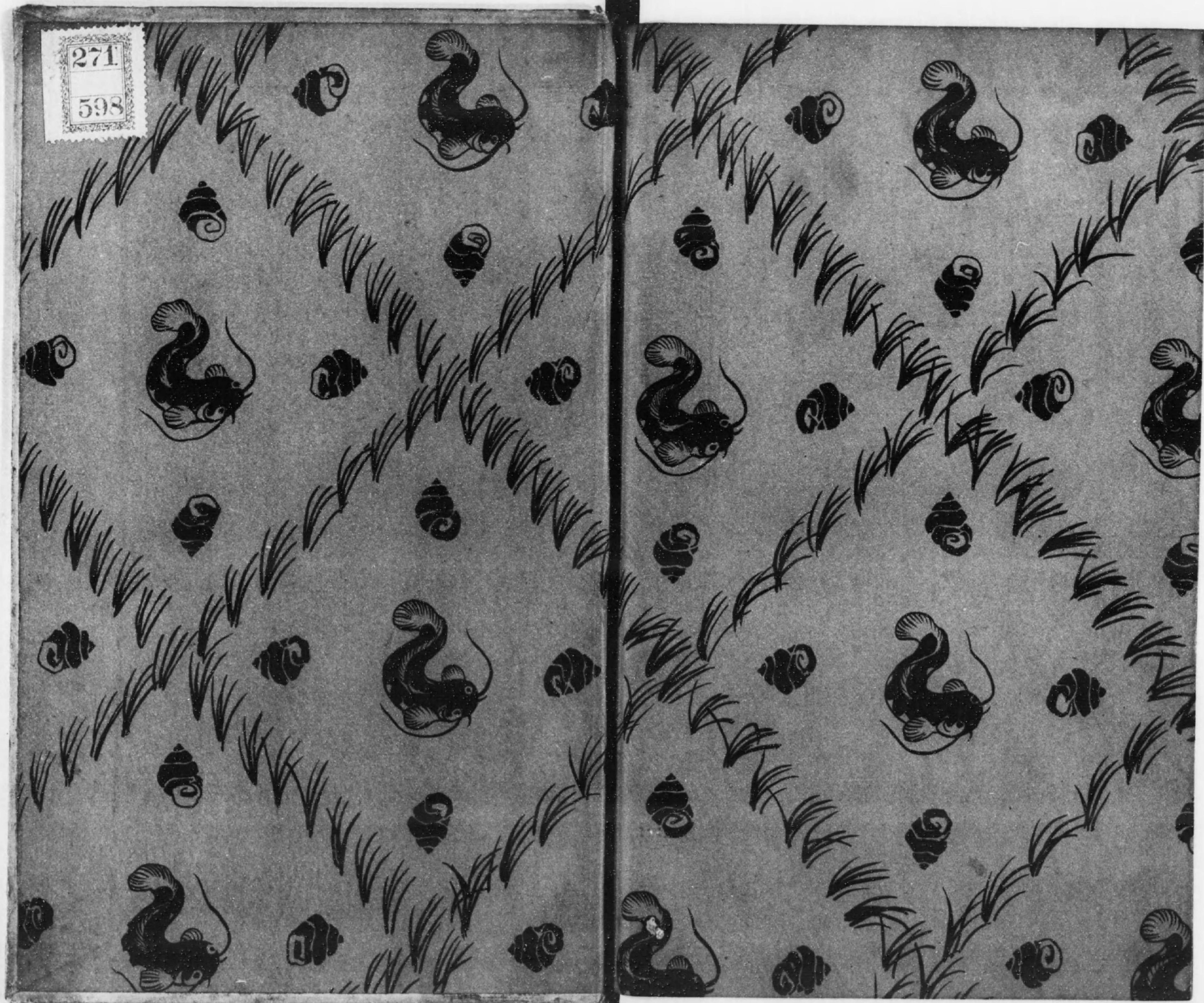
春 陽 堂

電話本局五十一番
振替口座東京一六一七



271

598



終

